

Title	京都北白川に源先生をお訪ねして
Author(s)	
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 135-142
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90437">https://hdl.handle.net/11094/90437</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 京都北白川に源先生をお訪ねして

昭和四十一年五月三日

出席者 酒井 藤塚 山口 桐本

その朝は清水寺の忠僕茶屋に、西村天囚先生の筆になる看板を見せて頂いたり、特に懇望して成就院のあの清らかな庭園を拜見させて頂いたりした。

午後源先生のお宅を訪れる。

閑寂な書齋で温顔の源豊宗先生に懷徳堂重建五十年に當り、その思出をお伺いすべく參上した旨を述べる。書



源 豊 宗 先 生

京都北白川に源先生をお訪ねして

齋のお庭は折からの五月雨で、一入緑濃やかにすがすがしい爽かさを覺えた。

先生 しかし必ずしも年のせいでもありませんが、記憶というものがだんだん薄くなって、この頃もう人の名前も仲々思い出せないですヨ。

藤塚 私もモノをよく忘れるようになりまして。

先生 何ですか懷徳堂は今もなおズット續けておいでになりますか。

酒井 ハイ毎年春秋二回の講座と見學會をやっております。

藤塚 また先生にもお願いしたいと思っています。先生夏ごろはお忙しうございますか、七八月ごろ。

先生 ソウデスネ、今豫定が決っていないですけれど、或は私その頃にはこちらに居ないかも知れません。

酒井 アメリカですか。

先生 まだそこは何とも判りません。何か御計畫ですか。

藤塚 見學會でございます。香港の方へ……

先生 今もつゞけられていられるとして、あの頃の人達はまだ残っておいでですか。

桐本 先日思出話を承るため圓珠庵で七八名集っていただきました。

酒井 次第に旅行なさいます。

先生 遠行ですネ。しかし新しい人も出来てくるわけですネ。今懷徳堂というものの組織の背景はどこがやっておられますか。

藤塚 今は昔のように寄付なんかも集りませんし、主に住友さん關係の會社、十五六社さんが交替で毎年いくらかづゝいたゞいております。マアどうかこうか運営いたしております。

先生 小倉さんの緣故ですネ。

藤塚 今度は五十週年になりますのでこの機會に何とか各方面の御援助を願うつもりでございます。

先生 アア云う毎週の定例講義、定例というのではなくて、私達が行っていったのは何というんですか。

酒井 定期講演と申します。

先生 アア云う定期講演は、今やっておられませぬネ。今は年に二回位一週間かそこら、いつか私も參りました。

酒井 懷徳堂講座としてやっております。

先生 以前のような講堂がないのですからネ。

藤塚 先生がおいで下さったアノ頃が、懷徳堂として一番盛んな時でございましたようです。

先生 そうですか。

酒井 聽講者も多うございました。

先生 恐らくあれが最後位いでないですか。私の記憶があるのは講義に行つてですネ、歸りに灯火管制でネ、眞暗になつてしまつてネ、自動車もつかまらないし、随分町角で待つて、やつとつかまえて歸つたということでした。

酒井 昭和十六年か。

先生 昭和十九秋かもつとあとだったか。

藤塚 あの頃、先生がおいで下さつていた時分の聽講者の態度というふうなものを、先生はいかにお感じになりましたでしょうか。

先生 懷徳堂といふますとネ、私が京都大學の最初の史學科にはいつた頃、国史の先生に内田銀藏という方が講義の代りに懷徳堂で講義された近世の日本という講義を出版され、その書を今言はゞ教科書のようにして話をされたんですヨ。私その時の印象ではとにかく吾々の大學の先生が懷徳堂へ行つてアア云う講義をされたというので、懷徳堂の講演というものは非常に權威があるも



源先生の書齋の額（内藤湖南先生筆）

のと思いました。  
事實そうでした。

確か桑原先生も行っておいでになりましたネ、マア懷徳堂の講義というものは吾々學生は勿論ですが、恐らく大學の先生達でも懷徳堂へ行って講演するということは一つのマア光榮と思っておられたと思います。私

等もその書物を讀みながら懷徳堂の講義というものは素晴らしいものだと思っていました。そして私は何年頃でしたか、昭和十年を超えていると思います。私が講演をたのまれた時は實際意外でしたし光榮にも思いました。

酒井 その時の御講義は何でございましたか。

先生 日本美術史で、恐らく最初佛像の話からしたと思います。幻燈を持って行って……その時分のスライドというのは大きなガラス板でしてネ、随分重いものを持

って行っただんですヨ。懷徳堂の映寫機は仲々立派でしてネよく寫りました。他の先生方も夜の講演でしたか。

酒井 皆さん夕方からでした。

先生 そうですか。ともかく行きますとネ、まづあそこの控室で辯當が出まして、あれも私、思出になりますヨ。どこからとられるのか仲々ご馳走でした。しかしマアあの頃から美術というものに一般の興味が高まってきました。ですから割合私の講義にはたくさん見えています。そしてアレ和歌山あたりからも来ておられましたネ。ともかくその聴講者の態度などほんとうに皆熱心でしたネ、別に試験をしないからどれほどとは判りませんけれど。

桐本 私あれはきかせて頂きました。スライドの印象も残っています。藤塚さんが幻燈係りで。

藤塚 あの機械はまだ残っています、使っていませんけれど。

先生 古物ですネ。

藤塚 もうレンズが曇っています。磨かんといいけません、あれは便利でした。

先生 あの時は一週に二回あったのと違いますか。

藤塚 一週一回で交替ですから隔回でした。先生には随分永くお願いいたしました。

先生 たしか天沼先生も丁度行っておられましたネ、澤潟先生も。私は何年位いやったでしょう。アレはズーツと續けたか、或は一年か二年休んでやりましたか、とにかく永い間私は行った記憶があります。

桐本 中村先生の古文書はそのあとですか。

藤塚 あれはズット前です。

先生 講義はなんですか、文學關係のほかに法學の講義もあつたんじゃないですか。

藤塚 月一回日曜日にソレは晝ありました。法學部、經濟學部の先生方におねがいました。

先生 あの當時講義をした先生方で現在おられる方は少ないんじゃないですか。中村さん、澤潟さん、私……

酒井 佛教の講義をされました羽溪先生、新村先生も……。

先生 新村先生はズット早いんじゃないですか。

藤塚 大分前でした。

先生 五十年といえますと大正五、六年で、西村天囚先生は。

酒井 西村先生は八年頃に東京へおいでになりました。

先生 私はネ、西村天囚先生はハッキリした記憶はないですけれど、アノ背の高い大きな體を大學でチラト見

た覚えがあるのです。西村先生が亡くなられたのはいつごろですか。

藤塚 大正十二年か十三年です。實は今日、西村先生がお書きになった看板が清水寺の甘酒茶屋にあるのを見て参りました。舟板で造られたもので御座います。アソコの主人というのが月照の下男をしていたもので大槻重助さん。ソノ後ズットつゞいて、現在忠僕茶屋と云つています。

先生 忠僕茶屋、今ありますネ。

藤塚 盛んにやっています。先日もアソコへ話を伺いに参り、今日もまた寄ってきました。

先生 誰れかそこに天囚先生を知っている人は居りませんでしたか。

酒井 いや居りません。

先生 藤塚さんは懷徳堂の第一期からご存じですか。

藤塚 イエ私が懷徳堂へきましたのは大正十二年です。

先生 ソレまでは……。

藤塚 吉田先生の他に矢壁という人が居りました。ソレでその人がやめて、吉田先生が私に來んかと云はれまして……。結局前に居ったところでジット辛棒していたらよかつたかも知れません。

先生 その頃は吉田さんは池田に居られたのですか。  
酒井 そうです。

藤塚 私は吉田先生に速記を習いましたのです。その關係で懷徳堂で講演があったら、それを速記して出版するということでした。

先生 それはどっちがいいかわかりませんヨ。藤塚さんは今もって斯うして文化の仕事にズット携つておられるんだから、それはよかったと思いますヨ。ソリヤ富豪にはなれないでしょうが懷徳堂の理想じゃないですか。

藤塚 昔の先生方の教えかも知れませぬナ。

先生 しかしあの頃は女の方も澤山見えていましたネ。

酒井 あの附近の濱池（醫師）さんの奥さん、それから大野（旅館の娘）さん、おばさんも来ていた。桑原直子さん、侍の娘でネ嚴格な方でした。懷徳堂の最初の頃には昔の侍が多かったですナ。薩摩の益満久之助さんの親籍の方とか、それから滿洲警察の方、陸軍歩兵大佐というような。

先生 考えてみると大阪というところは大學が出来たのは随分あとですが、町の學問というと京都より盛んだったのじゃないかと思えます。私の見るところでは京都ではあく云うような町の學問をするところとか、或は町

京都北白川に源先生をお訪ねして

の人達が學問をするために集つて、それを永くつゞけるというところはありませぬネ。それはね、私の例で申しますと、私が丁度向うへ講義に行つていた頃で昭和十五年に、女の方で皆私に話をしてくれというので、月に一度話をするという會が出来まして、その頃は村山リユウさんも居られました。それは金葉會と名前をつけました。私はその頃大阪は女專に毎週金曜日講義に行つておりました。その會が今もつて續いていまして、もう今年で二十七年になります。ですからその中には亡くなられた杉道助さんの奥さんも居られ、その頃から今日まで来て居られます。あのグループの方は藤澤さんの講義をきいておられました。そのつゞくということは、學問に對する愛着とでもいうものが、大阪には何か流れているのじゃないかと思えますヨ。中井竹山先生あく云う時代からの傳統というのがあるんじゃないですか。京都だつて江戸時代から町には學問をするところが無かつたわけじゃないんですが、現在一般市民は學校教育が終ると學問するとうのを忘れてしまふんじゃないですか。そういう一點で一種の大阪というところの風格があるように思います。

藤塚 京都では大阪のように講演會というようなものを引つゞきやつてるところはありませぬか。

先生 ありませんネ。

藤塚 確か吉川先生が京都で懷徳堂の講演會をやつてくれとおっしゃったことがありましたが、經費の關係でやめになりました。

先生 吉川先生のような立派な方が中心になられたら京都でも立派なものが出来ると思ひますネ。しかし大阪でもそんなに時間はかゝりません、小一時間そこそこで行けますから昔の懷徳堂までなら。

酒井 講堂が焼けたことは残念でした。焼けてなかったらまだ細々ながらも講義をつゞけていたかも知れません。

先生 住友さんのような財的背景がそう豊かでもなくとも講堂があるとすれば出来ます。この頃住友さんなんか仲々熱心でネ。今私頼まれてまだ行かないんですが、あそこの社員のため話をしてくれと、今交渉中で、來週から週一べんづゝ十回講義か何かを。そう云うような熱心な人達が居られるんですから、懷徳堂に建物があれば復活したかも知れないと思ひますネ。

藤塚 住友各社の重役のうちで、随分そう云う方面で熱心な方もおられます。

先生 この頃はネ、漢文というものは中學であんまり熱心に教えないでしょう。ですから大學へ入っても蘇東

坡ときいても知らないものがありますヨ。

酒井 それは無理もないやろナ。

先生 色んなことを詰め込まれるもんですから、そんなことは覚えてないんだけれど、私はネ新しい意味で、漢文というものは非常に面白い學問だと思ひます。日本人が漢文を忘れるというのは、日本文化に對する理解が出来ない、半減するでしょう。

桐本 漢文を讀みこなせなかつたら、日本の文化に對する理解ができません。

先生 それは本當です。今日日本外史で日本の歴史を知る必要はないにしても、昔の記録というものは皆漢文式で書いてあるんですからネ。そしてそればかりでなくて、文學として非常に價值が高いですから、今漢文學の講義というものがあつたら、私は案外聴衆が集るんじゃないかと思ひます。

桐本 春秋二回の講座でも相當熱心な方が集ります。

先生 けれども矢張り連續して、例えば文章軌範でもいゝですよ、あゝいうものを讀む講義が欲しいですネ。

酒井 全くそうです。(お庭の方は兩足いよいよしげく、木々の葉がしきりに打たれている)。

藤塚 是非もう一度復活したいものと存じます。大阪では今あゝ云うものがなくなりまして、泊園書院もつづ

れましたし、大鹽平八郎のあの洗心洞も。細々ながらもやっているのは懷徳堂だけです。

先生 今、木村さんが中心になっておられるのですネ。

藤塚 ハイ、事業運営委員で、木村先生に色々大變お世話になっております。

先生 ともかくあく云う方が中心になって、そして昔とは異なりますから、新しい感覚で懷徳堂を復活させたら、非常にいいだろうと思いますネ。あの頃は住友以外、朝日新聞からも。

藤塚 朝日新聞は廣告を出して頂きます今でも。

先生 朝日の廣告は學問をしているものには、一つの光を感じさせられましたヨ。しかし懷徳堂が新しい學問の場として、意味ある仕事をしているということが理解されれば、案外援助をしてくれる人があるんじゃないかと思えます。たゞネ、第三者から見ても昔の懷徳堂がそのまま延びて行くというのではなくて、今度はもう一つ新しい漢文學というものの新時代の使命を自覺して、そうしてもう一ぺんあそこで復活するという風に理解されればいいと思いますネ。今後復活出来ると思えば、あの様な日本風なものでなくて、鐵筋コンクリート造の様なものでもいいですよ。

京都北白川に源先生をお訪ねして

桐本 現在一寸相談に集まるところもないので、適塾を借りたりしております。

先生 どこです。

桐本 洪庵先生の舊宅で、あれは大阪の史蹟でして、懷徳堂記念會の事務所ということになっておりますが、もっと自由に使えるところが欲しいと思います。

先生 しかし前のものは場所は良かったですネ。大阪のまん中ですからネ。

藤塚 大阪府の土地でしたので戦災と同時に返しました。書庫も賣りました。

先生 書物は焼けなかったんですか。

藤塚 殆んど助かりました。

先生 その書物などは。

藤塚 皆大阪大學へ寄贈しました。そして私がその整理をやっています。場所がないので整理が仲々はかどりません。

酒井 早く建物が出来ればよいのですが。

先生 懷徳堂では西洋史の先生が行かれたことはあるんですか。京大の坂口先生、原先生など。

藤塚 坂口先生、原先生こられました。

先生 三浦先生も行かれましたか。

藤塚 エ三浦先生もお見えになりました。



酒井 三浦先生は二回位いお越し願ったと違えますか。

先生 そういう記録があるんでしよう。

藤塚 記録がネ、焼けたりなんかして。

先生 そう云うことでしたらこの際、懷徳堂史を作るべきですネ。ともかくまだ生き残っている人もあるんですから。二十數年もたつたんですから、段々歴史のかなたに消えて行きますヨ。あゝ云う見學會などはいつの頃からやっておいでですか。

酒井 松山先生のいらっしやった時からあつたのですから、大正十年ごろからと思います。

先生 あなたは何年ごろから懷徳堂に出入しておいでですか。

酒井 出入は講義が始まってからです。

先生 そうですか、それでは五十年史ですネ、驚くべきものですね。今おいくつです。

酒井 ハ……

先生 その頃は二十臺ですか。

酒井 なるか、ならぬかです。

先生 藤塚さんは。

藤塚 ハ……

先生 いづれも珍らしい存在ですヨ。五十年の歴史と

一緒に過したということは。あなたは懷徳堂の所員じゃなかつたんですナ。

酒井 聽講生でした。

先生 では第一回生ですナ。大變なものですネ。

桐本 野口幸雄さんを先生御存じですか。

先生 お顔を見れば思いだしますが、名前だけでは。

酒井 野口さんも存命であれば當然第一回生です。

先生 随分前から見學會をやっておられるが、その頃は誰がついて行かれました。

(松山先生以外には講師はなかつたこと、それから大阪というところ、町人の中でも色々な學問を好む人達に話に移り木村兼葭堂、篠崎小竹など話はそれからそれへとつゞき今朝集つてきた忠僕茶屋のことから月照にまで及ぶ。時間も相當たつたが戸外の雨は一しきり激しくなる。雨やどりにと先生がすゝめられるまゝ書齋の扁額の内藤先生筆蹟に話に移る)。

先生 戊辰は昭和三年です。皆この意味をきかれるんですが。なんでも玄奘三藏の唐の頃、あちらへ行つた僧に贈つた詩の中のものである由です。「舌を深して龍に授ける」講義をする對手が皆偉い人であるというような意味だそうです。(それから雨中を先生にわざわざタクシー乗場までお送りいただき辭去した)。